

# 商工業の発展と市民生活

戦前の小松市域は絹織物業の一大産地であったが、昭和十七年（一九四二）の企業整備で機業場の七割が軍需物資生産に業態換えした。戦後の小松織物は残余の施設・設備で開始されるが、原糸不足と絹・人絹の配給統制で操業



小松りんず（小松市立博物館所蔵）円内は模様の拡大図（右は「紗綾形花地模様入白生地」で、紗綾形文様は九谷焼にも多く用いられている）。

率は三五%にとどまった。二十三年、古織維を原糸とするガラ紡生産が勃興して苦境を一時的にしにのぎ、朝鮮特需景気が「ガチャ万」景気呼び込んで息を吹き返した。高度成長期に入って「小松りんず」をブランドに内地向生産を伸ばし、三十年代には輸出向織物と産額を二分した。二十九年のりんず産額は二六億円で、全織物総額の五八%を占めた。

大正中期に創立された小松製作所は戦後の市工業の発展を牽引した。二年の労使紛争（「百日闘争」）を乗り切った製作所は、二十七～三十年の「砲弾特需」で資本蓄積をすすめ、経営基盤を固めて建設機械メーカーへの地歩を築いた。主力のブルドーザはインフラ整備・民需拡大の波に乗って増産を



量産体制に入った小松製作所粟津工場（昭和35年）（コマツ粟津工場70周年記念誌「MADE IN AWAZU」より）主力のD50ブルドーザ組立ラインが完成、月産台数が昭和30年末25台から35年末250台へと10倍増となる

重ね、三十年代半ばに「ブルドーザの小松」の地位を確立した。三十七年、世界最大の米キヤタピラー社が日本に進出したが、徹底した品質管理で対抗した。四十年代に入って中国やアフリカ・中近東・東南アジアなど海外市場で確固たる地位を確立した。グローバ



三日市商店街(昭和30年代)(小松市立博物館提供)  
一斉大売出して買物客でにぎわう

ル・カンパニーに成長した製作所は、多くの関連企業を傘下におき、地域住民に就労の場をあたえ、市財政に大きく貢献した。企業城下町の頂点に立つ戦後の地域経済と住民生活を支えた。敗戦直後の市民生活は食糧難・インフレとのたたかいであった。二十一年八月、市街住民は七日間飯米の欠配に苦しんだ。翌年七月には端境期の食糧危機切り抜け緊急措置として料理屋・飲食店一三七店が一斉休業した。市民はヤミ市で生活物資を買い入れたが、ヤミ価格は三年間で二〇余倍にハネ上

がった。対して実質賃金(製造業)は戦前の五割に満たなかった。市民は家財を切り売りして日々の暮らしをつないだ。

市民生活が戦後復興の緒につきはじめた二十四年ころから一町あるいは街路沿いの数町を単位に商店街が形成された。旧町時代以来の老舗を軸に五〇余の商店で結成された商店街は、ネオン灯・街路灯で店街を照らし、シヨール・ウインドウで軒先を飾った。三十一年十一月、上本折町で鉄筋コンクリート二階建て三〇店を収容する共同店舗ビルが落成し、近代的な商店街のモデルとなった(かぶと商店街)。三十七年十月には国道八号線沿いの沖町地内に市総合卸売市場が完成した。店舗、鮮魚・青果物セリ場など二九棟を擁する公設市場は、低価格の生鮮食品を安定供給して市民の台所を支えた。さらに四十五年三月、駅前地下一階・地上五階の防災ビル(こまビル)が開業し、市街地商圏の拡大・活性化をもたらした。



かぶと商店街(昭和32年頃)(『小松の軌跡』より)

商工業の発展と並行して耐久消費財が一段と普及した。四十五年の自動車保有台数は二万八五四台で、対三十五年比で七・七倍増した。開通電話数は一万六四三〇台で、うち住宅用は五六五台、四世帯に一台の割合で普及した。テレビ受信契約数は二万二一四四件で、世帯普及率は一〇〇%を超えた。同年のカラー契約は四六%にすぎなかったが、四十八年に八〇%に達した。大量消費社会が到来し、市民の日常生活は利便性を増して質的に変化していった。(太多 誠)